はじめに

マレー半島地域の特徴として、異質性の混在という点をまずあげてよいであろう。古代から継続されてきた東西交渉の中で、この地域が有力な中継位置にあったことは、異質な文化背景をもつ様々な集団の混在状況が古くから始まっていたことを意味している。しかしながら、現在の混在状況の大半は、近代経済システムが世界的連関の下で形成されてきたことによって生み出されてきたものである。１９世紀後期からのイギリス植民地支配下における経済活動は、中国、インド、あるいはインドネシアをはじめとする近隣諸国から短期に大量の移民を呼び込み、未開の空間を埋めてきたからである。

本編の四つの論文は、マレー半島を対象に、いずれも現地調査による事例研究を基礎とした論考である。それらにおいては、インド、台湾、インドネシア（ジャワ）、タイでの各論者による実地調査が、それぞれマレー半島での調査事例の意味を解明するベースとなっている。以下、簡単に各論文の概要を記しておこう。

水島論文「南インドとマレー半島における土地所有について」は、南インドとマレー半島の両地域における村落調査を基礎にして、土地所有構造の側面から両地域の地域発展の固有性を論じたものである。それによれば、いずれの地域においても、イギリス植民地支配の下で形態的に酷似した土地制度が導入され、国家的土地所有の下での農民的土地所有が創設された。ところが、その実施時点およびその後の変化の実態は、両者において全く異なるものとなった。まず出発点において、マレー半島では、均質な小農的土地所有が人工的に生み出されたのに対して、南インドでは、極めて不均等な土地所有構造が生み出された。このような違いが生じた要因とその後の展開の様相の違いの要因について、植民地当局の政策目標、領域観念を媒介とした共同性、再生産活動のユニットなどの諸側面が分析され、結論として、イギリスの植民地土地制度が、マレー半島においては従来の観念とさほど違和感のないものであったために土地所有構造が大きく変化しなかったのに対し、南インドではそれが旧来の社会関係の一部のみがいびつな形で土地制度の中に組み込まれたために、出発点で極めて不均質な所有構造が創出され、にもかかわらず植民地的土地制度が本来持っていた個別化原理のために、その後大きな変化が生じたと論じられている。

三尾論文「シンガポール華人の伝統宗教の変容と組織化運動」は、台湾の文化人類学的研究を進めてきた筆者が、宗教組織の問題について、シンガポールでの事例研究を台湾でのそれと比較する形で議論を進めている。そこでは、まず台湾とシンガポールの華人社会が、いずれも南中国、特に福建系の移民が主流であり、先住民に対して支配権を握り、さらにいず

れも植民地支配を経験したという共通性が指摘される。しかし、それぞれの社会で開花した文化に大きな違いが生じており、その要因として、台湾が伝統的な漢民族文化がアイデンティティのよりどころとなる傾向があるのに対して、シンガポールの場合にはそうはならず、その結果シンガポール華人社会の宗教が大きな変化を被ったとの見通しが述べられる。次に、シンガポールの祭祀組織の実態が分析され、その特徴として地縁的性格が極めて希薄であることが指摘され、その要因がシンガポール政府の混住政策にあることが示唆される。続いて、シンガポールの社会状況の近代化に敏感に反応したユニークな廟の例や、宗教の「知識化」傾向を体現する道教総会の例が取り上げられ、それぞれの実態と特徴が分析されている。実態調査の整理と氏が従来蓄積してきた台湾の宗教との比較の視点の提示の段階であるが、今後の調査の進展によって、両社会の地域特性についての議論が深まるであろう。

西井論文「南タイのムスリム・仏教徒混住村落における宗教的帰属と親族関係」は、タイ・マレーシア国境地帯での村落調査を基礎に、個人を中心としたキンドレッドと、祖先を中心として系的に辿られる出自という親族の二類型が、イスラームと仏教という宗教的帰属とどう関わるかを論じたものである。それによれば、親族関係の特徴として、人の移動性が極めて高く、世帯および近隣居住世帯のメンバーシップと構成が頻繁に変わること、しかし、その流動性は、マレー家族の特徴を、従来議論されてきているように、「二者関係の累積」であり境界が曖昧な社会圏として捉えることを可能にするだけではなく、それが一組の夫婦を中心に展開しているという点が強調される。また、ムスリムと仏教徒が結婚した場合の問題について、生活共同単位としての家族は同一宗教でなければならないという規制があることから、こうした流動的で曖昧な家族概念の中に、生活共同単位としての家族と相互扶助ネットワークでもある親族近隣居住集団との間の境界を明確にする原理が持ち込まれることになると指摘される。続いて、婚姻に関して、ムスリム－仏教徒の通婚率が高く、しかも婚姻後の改宗が双方向であるという東南アジア社会にはあまり見られない特異な状況が調査村で見られることが示され、婚姻の諸側面が分析される。そこでは、通婚によって生ずる宗教的帰属が求める排他的原理と親族の共属原理との関係は、状況に応じて共存し、あるいは対立するものであると論じられている。

宮崎論文 “Alienation and Adaptation: Javanese Immigrants in Malay Society” は、インドネシア研究を進めてきた筆者が、マレーシアでのジャワ系移民の中心地のひとつであるジョホールで行った実態調査の報告である。そこでは、ジャワ人のマレーシアおよび調査地への移民の歴史的過程と要因が語られた後に、ジャワ人のイメージとしてしばしば託宣や民間医療に長けていると考えられているという問題について、なぜそのようなイメージが生ずるようになったのかを、薬草についての知識や、ユニークな暦の使用、ジャワ人の周縁性等の側面から分析している。続いて、ジャワ系移民のマレー社会という環境の中での変容について、特

にイスラームとの関係から議論し、「正統」ムスリムになることがジャワ人のアイデンティティとしての超自然的な能力に対する依存の希薄化を招き、それが新たに故地ジャワへの懐古とジャワらしさを回復させようとする動きをもたらしていること、しかしそこで再生されるジャワ的なものは、既に故地のそれとはズレた、マレー社会に適応し、包含されたものとなっていることが指摘されている。

以上の概要から明らかなように、いずれもマレー半島を対象とはしているものの、実際に取り上げられている事象は多様であり、またアプローチの方法もそれぞれのディシプリンを反映して多様である。それは、最初に記した異質性の混在状況をそのまま反映したものであると同時に、比較という方法自体が持つ個性と普遍性の矛盾が、こうした地域研究の場で常に起きるという方法論上の問題を示唆してもいる。事例研究の積み重ねはもちろんであるが、調査地域あるいは調査事項の共通性を研究者間で意識して作り上げる努力も必要のように思われる。

どのようなこの地域の発展の固有性が総合的に提示されるのかはまだ先の段階の課題に思われるが、本編の論点が、そのための問題提起となれば幸いである。

本報告書は、平成五－六年度、東南アジア研究センター主宰の重点領域研究「地域発展の固有性」の公募研究「複合社会の形成原理に関する基礎研究」（課題番号 06206103）の成果の一部である。出版に当たり、同センターの田中耕司教授、事務局の河野美佳さんをはじめ、スタッフの方々にご協力頂いた。深く感謝したい。

1996年8月

水島　司